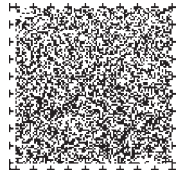


第1回医療機器の世界フォーラムに参加して

研究所福祉機器開発部 高齢障害者福祉機器研究室長 廣瀬 秀行



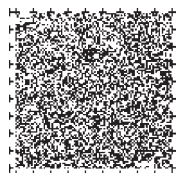
WHO主催で第1回医療機器の世界フォーラム (First Global Forum on Medical Devices) がバンコックで9月9-11日に開催された。この会議は発展途上国または低収入地域の健康管理には医療機器が大きな役割を果たすが、現時点で十分な役割を果たしていない。今まで医療援助は行われてきたが、10%程度しか使用されていなく、その理由として管理不十分であり、さらに電源の確保が困難で使用できず、また医療技術の進歩にも追従していないなどの問題が起きていた。そこで、それらを解決する道を探ることが大きな目的となっている。特に、発展途上国での医学的問題点は、マラリア、結核、そして出産であり、それらの医療援助が重要視された。よって、障害者への対応は現時点で将来の課題であり、議論になる土壌ではなかった。また、欧米では医療機器と福祉機器は同じ医療機器に入るが、日本では福祉機器は法律で対象外になっている。それらを含めて、理解困難な用語や概念が続出し、最後まで苦しんだ会議でした。しかし、その概念構成は明らかに、福祉機器の構成概念を超え、参考になるものばかりであった。

内容としては、タイのAbhisit Vejjajiva首相 (写真1) やパンデミックで有名になったWHOの事務総長 Dr Margaret Chan (写真2) の「Medical devices: an area of great promise」のYou represent a diversity of disciplines, interests, and country experiences. This diversity is important given the complexity of the task before us. (あなた方

は国での経験や専門、研究分野など多様性を代表している。この多様性は我々の前にある仕事の複雑さにおいて重要である) (詳細はwww.who.int/dg/speeches/2010/med_device_20100909/en/index.html) から始まった。内容は途上国向け医療機器の開発、管理、法律、倫理、技術評価、財源など関連する分野の話題を取り上げ、最終的な今後の行動指針に結び付けていた。例えば、電源が十分でない場合が多く、太陽パネルを使用したエネルギー供給や手術室が全面窓になっているなどインフラを考慮した対応やEBMや価格価値を配慮し、また基礎の機器開発研究のサポートの仕方なども検討された。

特に、今回の会議は参加者に電子手帳 (写真3) が渡され、これはフォーラムのプログラムが入り、他に、参加者の位置情報、名刺交換、資料獲得、そして投票に大活躍した。特に、重要なテーマについて今後の進め方を決めるところでは、専門家が話題提供をし、それらに基づいてフロアーから意見特に推奨をもとめ、それらが表となって整理され、それを電子手帳でフロアーにいる我々が投票し、上位を決定していく手法であった。リアルタイムにすべてを決定できるシステムと同時に、運営のすごさを知った。

また、宇宙技術の可能性で講演された宇宙飛行士の向井千秋さんと色々と話すことができよい機会を得ました。



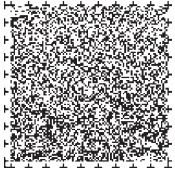


写真1 Abhisit Vejjajiva首相の講演



写真2 Dr Margaret Chanの講演

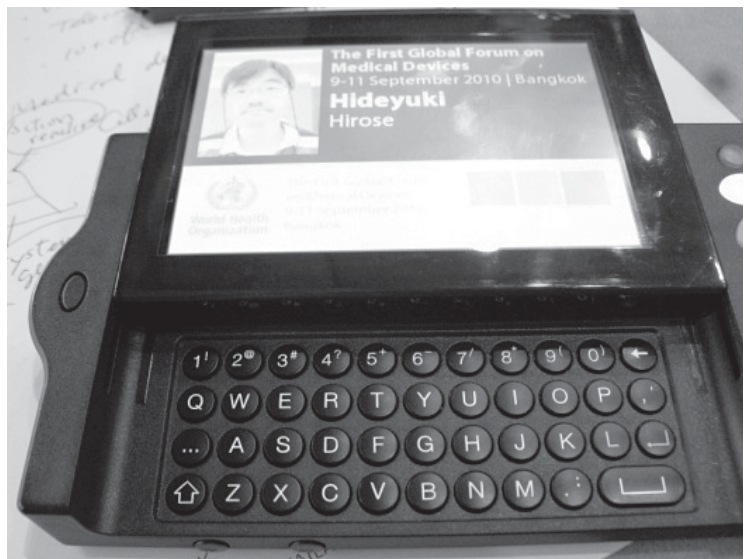
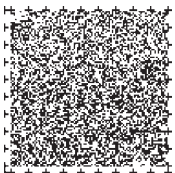
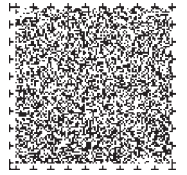


写真3 渡された電子手帳



盲ろう者宿泊型生活訓練等 モデル事業がはじまりました

自立支援局 自立訓練部



平成22年10月1日から、盲ろう者を対象に、常時通訳介助者等を配置した自立訓練と宿泊支援を中心に提供する、モデル事業を本格的に開始しました。この事業は、当センターの自立支援局、病院、研究所、学院、そして全国盲ろう者協会が構成する実施委員会が実施主体となって運営しています。4月から、生活支援、訓練、支援プログラム等の支援部会を設け、10月の支援開始をめざして準備を進めてきました。6ヶ月という短い準備期間でよく間に合ったと冷や汗を

かくほど、色々なことがありました。モデルハウスは、建築して以来浴槽のお湯が出ないことに端を発し、住環境を整えるため、配管、内装、配線など次々と工事が必要になり、センター各部署の皆さんに大変お世話になりました。うっそうと茂る草におおわれたモデルハウスの中で、無数のヤブ蚊に襲われながら片付けと改修作業を続け、9月下旬にようやく住居らしい状態にまとまりました。

その間、全国盲ろう者協会が通訳介助者の公募を行い、通訳介助員の応募数は80人を越え、通訳介助者のコーディネーターから嬉しい悲鳴があがりました。4人の利用者に対し、1日あたり3交替4シフトの通訳支援体制を組みますが、コーディネーターが毎月120回分のシフトを考えるのは大変な作業です。生活支援のコーディネーターは、このほかに、毎週末・休日のレクリエーションも企画します。10月の企画は、秋らしく银杏拾いに始まり、スポーツの練習、都内への外出支援、買い物など、多様な余暇活動を提供していますが、これもまた、支援内容がマンネリ化しないように1年間アイデアを出し続けるのが大変です。

モデル事業の利用については、北海道から九州まで全国各地の盲ろう者から定員を超える応募があり、各応募者に事前の訪問面接を通じて簡易的なアセスメントを行い、訓練目的や訓練に必要な期間・時期などが事業と合致する9名の方を内定しました。年齢、性別、訓練の目標、主なコミュニケーション手段などがそれぞれ異なる方の利用を通じて、多様性のある盲ろう者支援に取り組む格好の機会を設けることができました。

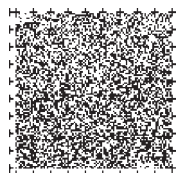
10月から、モデルハウスには明りが灯り、いつも手話や笑い声に満ちてにぎやかです。これから1年間、どのような出来事が待っているのか楽しみな毎日が始まりました。今後、訓練支援の進捗など、機会がありましたら、新たなご報告をいたします。

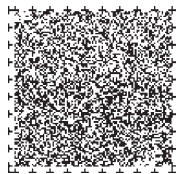


触手話で盲ろう者同士の会話もはずみます



柔道の試合進行も通訳者のおかげでよくわかります





就労支援セミナーの開催報告

理療教育・就労支援部就労移行支援課就労相談室

猛暑の夏がようやく終わりを告げ秋の便りが聞こえ始めた9月29日、本館大会議室において就労移行支援利用者を対象とした就労支援セミナーを開催いたしました。このセミナーは、例年秋の就職面接会シーズンを前に、障害者雇用に積極的に取り組まれている企業の人事担当者や企業等で現に就労されている修了者等を講師にお招きして、企業はどのような人材を求めているのか、就労に際してどこがけておくべきことは何か、就職活動にはどのように取り組んだらよいのかなどについてそれぞれのお立場からご講演をいただき、利用者の方々に進路検討や就職活動等の参考にしていただいているものです。

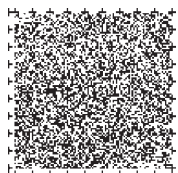
今年度は、障害者雇用を担当されているお立場から（株）富士薬品ユニバーサルネット総務部次長高木恒夫様、当事者のお立場から太陽生命保険株式会社所沢支社の高橋香奈様を講師としてお招きいたしました。セミナーには、就労移行支援利用者のほか、自立訓練利用者、職員を含め、昨年度の60名を大きく上回る81名の参加者がありました。

はじめに、高橋香奈様からご講演をいただきました。高橋様は、平成19年から平成21年まで当センターの就労移行支援（第4就労支援室）で訓練を受けられた後、現在勤務されている太陽生命保険株式会社所沢支社に採用となりました。今でこそ、会社でなくてはならない社員として忙しく仕事をされている高橋様ですが、就職に至るまでの道のりではいろいろなご苦労があり、そのなかで学んでこられたことを後輩である利用者の方々に伝えて下さいました。一つは、就職活動に際して複数の選択肢や場合を想定しながら就職活動表を実際に書き出してみたこと。これによって、あれもこれも考えて混乱しがちな自分自身の気持ちを整理し、第三者にも自分の

考えを伝える際の手段として役立つことができたとのことでした。もう一つは、履歴書を何社に

も郵送したものの、いずれも採用に至らなかった経験から、書類選考を行う会社は就職活動の対象からはずし面接選考のみという会社に絞って応募されたこと。これは、書類では自分の意欲が伝わらない、面接であれば直接企業にやる気を伝えられると考えられたからだそうです。この作戦が功を奏して採用になったのが現在の会社です。さらに、採用後の職場での経験から、就労する上で大切な3つのポイントを提示して下さいました。①「職場での人間関係、コミュニケーション」まずは、自分から挨拶をすること、相手の言っていることを理解しようとする姿勢が大切であること。②「ビジネスマナー」正しい言葉遣いができること、相手にわかりやすく伝えることが大切であること。③「目標をもってチャレンジ」職場で様々な資格取得にチャレンジし、仕事の幅を拡げてこられた高橋様ならではの説得力のある助言でご講演を締めくくって下さいました。

つづいて、（株）富士薬品ユニバーサルネットの高木様からご講演をいただきました。（株）富士薬品ユニバーサルネットは、（株）富士薬品の特例子会社として平成20年に設立、関東圏に展開するドラッグストア「セイムス」各店舗からの返品作業を一手に担い障害者雇用を実現しています。高木様は、同社にあって障害者採用担当の責任者のお立場にあります。また、株式会社西友の特例子会社である西友サービスの管理部門長、埼玉県障害者雇用サポートセンター企業支援のアドバイザーを歴任されてこられたご経験から、社会動向や企業側の考え方も踏まえながら障害者雇用の実際についてわかりやすくお話し下さいました。その上で、企業が求める人材について、①正しい言葉遣いや自分から挨拶ができること、感謝や謝罪等の言葉が自然に出てくること、②素直でまじめに取り組めること、③やる気があること、④根気があること、⑤決められた時間に出勤ができるように健康管理ができることの5点をあげ



られました。また、就労後につまずいたり、退職に至った事例をみてこられた経験から、障害や不得手なことも含めて自分をしっかりみつめた上で就労に向けてチャレンジしていくことが何よりも重要であることを強調されました。

両講師のご講演後、質疑応答の時間を設けさせていただきましたが、多くの質問が寄せられ就職活動に対する関心の高さをうかがうことができました。当事者の立場から実体験に基づいた説得力のあるご講演と、採用する企業側の立場から厳しくも力強い

エールのメッセージが込められたご講演をいただいたことで、今後の就労に向けて何らかのヒントを得ていただけたものと期待いたしております。今後とも、就労相談室ではこうした就労支援セミナーを定期的で開催しながら、就労に向けた支援をすすめてまいりたいと考えております。

最後に、お忙しい中にもかかわらず快く講師をお引き受けいただいた高橋様と高木様に、心より御礼申し上げます。

